ヨーロッパヒスタミン学会 第9回会議の報告

佐伯清美*

medical topics

Report of ninth meeting of the European histamine
research society
Kiyomi Saeki

ヨーロッパヒスタミン学会 (The European Histamine Research Society) は、従来 The European Branch of the Histamine Club と称していたが、Stockholm の第8回年次会議 (1979年) より改称したものである。会員100名程度のこじんまりした学会ではあるが、ヒスタミンや炎症の薬理では定評のある “Agents and Actions” を機関誌として発行していることで知られている。この学会の主要メンバーはつぎのとおりである。

secretary general: G.B. West (England)

national secretaries: B. Diamant (Denmark), F. Erjavec (Yugoslavia), Z. Huszti (Hungary), H. Karpunen (Finland), R. Keller (Switzerland), W. Lorenz (West Germany), Cz. Maslinski (Poland), P.F. Mannaioni (Italy), J.C. Schwartz (France), B. Uvnäs (Sweden)

honorary members: H.O. Schild (England), J.L. Parrot (France)

昨年の第9回会議は5月7～9日の3日間ハンガリー国立薬物研究所 Z. Huszti 博士の主催でブダペスト近郊のビュエグラードで開かれた。会場に選ばれたのは、ドナウ川をはるかに見おろす丘の上の瀟洒なホテルであった。参加者は92名を数えた。もちろん、そのほとんどは東西ヨーロッパ諸国の人々であった。筆者は西ドイツのマールブルグ大学 W. Lorenz 教授のすすめで参加する機会を得たが、特別参加はほかにもカナダとキューバから各1名があった。

会議は H.O. Schild 教授 (ロンドン大学) の opening lecture “The multiple facets of histamine research” で始まった。研究発表はヒスタミンの合成と代謝、ヒスタミン遊離、アレルギーならびにその他の臨床疾患におけるヒスタミン、中枢神経系におけるヒスタミンの役割、胃液分泌におけるヒスタミン、ヒスタミンアゴニストおよび拮抗薬、血管におけるヒスタミン——の六つの session にわけて行われた。

まず、炎症との関係のふかい、ヒスタミン遊離ならびに臨床疾患におけるヒスタミンの領域での報告の主なものを列挙すると、つぎのとおりであった。ラット肥満細胞の IgG レセプター、substance P などの内因性物質・ハチ毒 MCD ペプチド・多糖体・thapsigargin・コリン作動薬・その他によるヒスタミン遊離、H₁ レセプター拮抗薬ケトチフェンのヒスタミン遊離抑制作用、Ca⁺⁺・Mg⁺⁺ 賦活 ATPase・細胞内ならびに細胞外カルシウム

のヒスタミン遊離における役割、ラット肥満細胞のムスカリン作動性レセプター、喘息児の全血からの IgE 誘発性ヒスタミン遊離に対するテオフィリンの影響、アスピリン喘息とヒスタミン遊離、メチルコラントレン誘発線維肉腫の増殖に及ぼすヒスタミンアゴニストならびに拮抗薬の影響、ヒトリンパ球の細胞分裂反応に対するヒスタミンの効果、アレルギーの生物学的定量系としての肥満細胞からのヒスタミン遊離、クロモグリク酸の作用機構、選択的 H₂ アゴニストによる好塩基球からのアナフィラキシー性ヒスタミン遊離の抑制、イオノフォア A 23187 誘発性ヒスタミン遊離に対する抗アレルギー薬の効果など合計31題。筆者はこの領域では、マウス IgE 抗体感作ラット肥満細胞からのアナフィラキシー性ヒスタミン遊離について報告した。同様の実験系についてはポーランドの Cz. Maslinski 教授らの発表もあった。

上記のほかにも、中枢神経系機能や胃液分泌とヒスタミン、H₂ 拮抗薬研究の発展など各領域で興味ぶかい報告が多かったが省略する。なお、会議の結果は “Agents and Actions” vol. 11 に掲載される予定である。

この会議は、参加者があまり多くないために、一室で各報告について全員で徹底的に討論できる点に特長がある。参加者は個人的にたがいに知己であり、きびしさのうちに適当なユーモアを交えながらの議論の進めかたには感心させられた。

第2日は午後5時半に一同バス3台で excursion に出発。ドナウ川をはさんでチェコスロバキアに臨むエステルゴムの大聖堂でのオルガンコンサートの後、同河畔のレストランで夕食会が開かれ、ハンガリー料理とジプシー音楽を満喫した。この会議には社会主義圏の学者が多数参加しており、彼らと研究室の情況から日常生活に至るまでのさまざまな問題をうちとけて話し合うことができたのも、貴重な経験となった。この学会には Dr. G.B. West 作詞作曲の “会歌” があり、例年のとおりこの夕食会でも彼の指揮で全員で合唱した。アカデミックな会で “会歌” までするのはめずらしいので、蛇足ながらあえて紹介する (歌詞省略)。

* Department of Pharmacology Okayama University
Medical School. 岡山大学医学部薬理学教室